

平成24年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告

No. I 日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築 —第3報—

| | | | | |
|-------|---------------------|---------------------|---------------------|--|
| 研究班長 | 福林 徹 ¹⁾ | | | |
| 研究班員 | 池田 浩 ²⁾ | 奥脇 透 ³⁾ | 清水 結 ⁴⁾ | |
| | 津田 清美 ⁵⁾ | 中田 研 ⁶⁾ | 藤谷 博人 ⁷⁾ | |
| | 古谷 正博 ⁸⁾ | 松田 直樹 ³⁾ | 三木 英之 ⁴⁾ | |
| | 宮崎 誠司 ⁹⁾ | | | |
| 担当研究員 | 青野 博 ¹⁰⁾ | | | |

目 次

| | |
|-----------------------------------|----|
| 緒言 | 2 |
| 1. 全国的なスポーツ外傷統計 | |
| 1-1. 学校管理下（中高生の部活動）におけるスポーツ外傷発生調査 | |
| 1-1-1. 平成23年度統計報告 | 3 |
| 1-1-2. 平成21～23年度における3年間のまとめ | 10 |
| 1-1-3. 特定種目、特定疾患に関する調査 | 23 |
| 1-2. スポーツ安全保険におけるスポーツ外傷発生調査 | |
| 1-2-1. 平成23年度統計報告 | 34 |
| 1-2-2. 平成21～23年度における3年間のまとめ | 48 |
| 2. 各競技におけるスポーツ外傷発生調査 | |
| 2-1. サッカー | 54 |
| 2-2. バスケットボール | 60 |
| 2-3. ラグビーフットボール | 64 |
| 2-4. アメリカンフットボール | 69 |
| 2-5. テニス | 72 |
| 2-6. 柔道 | 76 |
| 3. スポーツ外傷・障害予防プログラムの開発・検証 | |
| 3-1. サッカーにおけるプログラム検証 | 80 |
| 3-2. バスケットボールにおけるプログラム検証 | 88 |
| 3-3. 重症頭頸部外傷に対する提言 | 95 |

1) 早稲田大学、2) 順天堂大学、3) 国立スポーツ科学センター、4) 平塚共済病院、5) 日本バスケットボール協会、
6) 大阪大学大学院、7) 聖マリアンナ医科大学、8) 古谷整形外科、9) 東海大学、10) 日本体育協会

緒 言

日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築 - 第3報 -

福林 徹¹⁾

ロンドンオリンピックにおける日本選手団の活躍、さらには2020年のオリンピックの東京招致を目指しての盛り上がりは、スポーツ振興にとって大きな盛り上がりとなった反面、スポーツにおける体罰の問題は、日本のスポーツ界の悪しき風習をさらけ出す結果となった。スポーツ外傷を減少させるためには、選手はもちろん、現場で選手の指導する立場にある監督、コーチが、今までの慣習にとらわれず、スポーツ医学に基づいた理論的指導と、選手一人一人の能力にあったメニューの作成がきわめて重要である。是非この機会に精神論に基づいたトレーニング法から選手の能力に応じたきめの細かい指導をお願いしたいと考えており、それによりスポーツの外傷の発生も自ずと減少するものと期待している。

今年度は「日本におけるスポーツ外傷サーベイランスシステムの構築」の研究の最終年度にあたる。そこで昨年度と同じく全国的な外傷統計として日本スポーツ振興センター学校安全部およびスポーツ安全協会の平成23年統計を掲載した。部位別では昨年同様生命に関わる重症外傷である頭頸部外傷に重点を置き、脳震盪について調査を行った。また整形外科関連の外傷として膝前十字靭帯損傷、第5中足骨骨折、肩関節脱臼について細かい分析を昨年に引き続き行うとともにこの3年間の推移を記載した。スポーツによる外傷の発生傾向はこの3年間同一傾向を示しながらも、特に平成22年は増加の傾向を示し、けして減少傾向にないことが判明した。なお本年は特に日本スポーツ振興センター学校安全部の統計としてラグビー、柔道、サッカー、バスケットボール、テニスを取り上げ、各々の種目が持つ外傷の特徴を今後の外傷予防の取り組みを想定しながら詳細に分析した。ラグビー、柔道の二種目については頭頸部重症外傷に関して詳細な検討を行い、特に柔道に関しては体育授業中と部活動に分けて検討を行っ

た。サッカー、バスケットボールでは年齢別、男女別に膝前十字靭帯や足関節捻挫、第五中足骨骨折(疲労骨折を含む)の発生頻度を比較検討し、その性別、年齢別の特徴を明らかにした。同様にテニスについても足関節捻挫につき同様の検討を行った。

国内競技会におけるスポーツ外傷発生調査に関しては、サッカーJリーグ、Fリーグ、なでしこリーグ、女子バスケット日本リーグ(WJBL)、ラグビートップリーグ、アメリカンフットボール社会人および大学リーグ、そして、テニス国内主要大会における調査結果を報告するとともに、柔道における頭頸部外傷の統計報告を掲載した。

スポーツ外傷・障害予防プログラムの開発・検証に関して、サッカーからは、Jリーグやなでしこリーグの下部組織、JFAアカデミーに依頼したFIFA11+プログラムの介入の結果を、外傷発生頻度と運動能力レベルの両方からご報告いただいた。症例数が大幅に増えた事もあり、報告内容が第二年次と一部異なった結果となった。

この3年間の研究を通じて日本においてスポーツ外傷サーベイランスとしてはスポーツ安全協会と日本スポーツ振興センターの全国統計データを詳細に検討することにより、スポーツ種目別、年齢別にある程度信頼性のあるデータを得られる事が判明した。またJリーグ、ラグビートップリーグ、女子バスケット日本リーグ(WJBL)、アメリカンフットボール社会人および大学リーグなど各リーグできちんとした試合時の外傷統計の提出を義務づけている組織では、それをもとにより詳細な外傷の検討をすることが出来ることが判明した。今後はこれらのスポーツ外傷サーベイランス結果を生かし、現場での外傷を予防するために、種目別、性別、年齢別に有用な介入プログラムを作成できるかにあるといえよう。

最後に、執筆いただいた研究班員諸氏、および各種調査にご協力いただいた関係者の皆様に深謝申し上げます。

1) 早稲田大学スポーツ科学学術院